
T.R.M.C 『イレギュラー達の日常ゲーム』

柊千終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T・R・M・C 『イレギュラー達の日常ゲーム』

【Nコード】

N6117Y

【作者名】

柊 千終

【あらすじ】

東央学園に存在する特殊機関『危機管理委員会』。抜群の行動力と完璧なトラブルシューティング能力を合わせもち、解決した事件は数知れないが残した被害も相当な悪者じみたヒーロー達。

そんな彼らの日常生活が普通に過ぎる訳はなかった。

1 - 1 最低最悪のファーストコンタクト（前書き）

オリジナル2作目。……やっちゃんいました。

1-1 最低最悪のファーストコンタクト

ゆるゆると日の光を浴びながら、いわゆる遅刻坂と呼ばれる急な坂道を登り切ると右手には古風な石造りの門が見え、正面には近代的なコンクリート製の門が構えられているのが見える。

現代と過去が同居しているようなそこは空間そのものが一種のタイムマシンのようであった。

――私立東央学園。この街を見下ろす小高い丘の上に建てられ、創立は明治時代にまで遡る歴史ある高校だ。

進学率も上々、何よりも生徒の自主性を重んじる開けた校風で人気も高い。

その証拠にこの高校の制服である濃い緑色のブレザーと灰色のチエツクのズボンを身に付けていれば、それだけで地元の学生は羨望の眼差しを向ける。

更に自主性を重んじる故に、部活動も盛んでここ数年の間にとんとんレベルを挙げてきたバスケット部、サッカー部を筆頭に全部で30程のクラブが存在している。

スポーツ面でも学習面でも近年、上昇を見せているこの学校は今や新進気鋭の名門校として広く認知され始めてきた。

スポーツをしたい者はクラブに入り、勉学に励みたい者には充実した学習環境が提供され、通う生徒は皆それぞれの時間を謳歌している。正に理想的な高校生活といえよう。

ところで、一般の学校に生徒会があるように、この高校にも勿論それがあつた。

ただこの生徒会は教師陣や、理事会などあらゆる権力層からの干渉を受けない。簡単に言えば、生徒会がやる事に口は出されないのだ。生徒が考え生徒が行動し、生徒自身で成し遂げる。実質学校生活の全てが生徒会によって運営されていると言っても過言ではない。

自らで達成させる事で、社会に出た時の自信を付けさせる。それがこの高校の教育方針故に、そのような自由が実現している。

しかし、生徒会に口出ししないのはそれだけが理由ではない。寧ろもう一つの方が主な理由であろう。

理事会を初め教師陣達の間ではあるワードが浸透している。

それは

---『触らぬ神に祟りなし』---

これは生徒会、厳密に言えば生徒会が有するある委員会を黙認する意を示す言葉だ。

口は出さない、手も出さない。火の粉を被りたくなかったら近寄らないのがベストの選択だと彼らはとうの昔にそう割り切っていた。

東央学園には生徒会の他に5つの委員会が存在する。

文化活動を担う『文化委員会』

体育活動を担う『体育委員会』

校内の環境整備を担う『美化委員会』

図書業務全般を担う『図書委員会』

そして

生徒の円滑な学校生活の支援を担う『危機管理委員会』

通称をT・R・M・C『Touou・Risk・Management・Committee』

更にこの委員会こそ、教師陣が頭を痛める厄介事を生み出す元凶であった。実際教師の間では何度も取り潰そうという案が出た、が、マイナス面を全て埋めて釣りがくる程の実績がある為結局はうやむやになってしまった。

良くも悪くも優秀である事に間違いはない。ならば、此方からは干渉しない代わりに自分達でした事は自分達で処理するようにとの取り決めで今も存続している。

現在までの過程が過程ゆえに、その名は有名であった。そして活動が活動ゆえに校外にまでその名は轟いていった。

ただし、勇名ゆうなというよりは悪名あくみに近い。曰わく、問題を1つ解決すればその後には10倍の被害が残る。

曰わく、悪魔すらも踏みにじる最凶集団。

群を抜いて常識外れなその行動によって付いた異名が『東央学園の

とは言え彼らを頼る者達がいるのも事実であり、その信頼性を裏付ける実績があるのもまた事実。

実際に、彼らが残した被害も数え切れないが解決したトラブルもそれこそ無数にある。

小さなものは落とし物の探索から大きいものは不良グループの制圧まで、全て『危機管理委員会』が成し遂げてきた。

悪者みたいな正義の味方。矛盾しているようだが彼らを評するにはこれが一番ぴったりとくるだろう。

生徒の為には粉骨砕身働くが、必要とあらばルールを平気で踏みじり、高笑いしながら学校生活の障害を潰す。

悪名だかいヒーロー達。そんな彼らは今日もまた、ちょっと特殊な日常をめぐるしく走り回っているのだ。

* * *

「…暑い……。」

東央学園へと続く長い長い坂道をひたすら登る1つの影。季節は冬と言っても今日は晴天。おまけに時刻はもう9時を回っている為に太陽はすっかりその姿を現していた。

極めつけにこの山岳部が練習に使いそうな坂道だ。汗がこめかみを伝い、Yシャツの背中にもじんわりと染みてきている。

普通9時を回っているなら、授業はとっくに始まっているだろう。それは東央学園でも例に漏れはしない。

それなのに今更登校しているのは詰まる所の遅刻だった。朝6時にセットしておいた筈の時計が、何故か午後6時にセットされていたのである。

これではスヌーズに設定していても意味がない。午後6時を過ぎて定期的にアラームが鳴っても何の役に立つと言っただ。

「この時間なら2時間目中だな。確か：古典か、なら面倒くさいしもう少しゆつくり行ってもいいだろ。…ってかいつそのこと今日さぼっちまうかな。」

携帯を開いて時間を確かめ、学生として割とダメな事を呟く少年。名を志本創^{しのまたぞう}。東央学園1年B組所属の何の変哲もないそんじょそこの高校生である。

余りに何も無さ過ぎて平均の擬人化と揶揄される事もしばしばだ。試験だろうが、スポーツだろうが何をさせてもきっかり平均値を取るのだから。ここまで来たら最早才能の域であろう。

普通で有り続ける天才やミスターアベレージ等、そこはかたなく馬鹿にしているような渾名が付くのも仕方ないと言えば仕方ない。

まあ、それでも彼は彼なりに自分の現在の生活に満足している。普通が一番だし、出る杭は打たれるというではないか。

誰からも疎まれずに日々を楽しむには現在の立ち位置はなかなかのベストポジション。

貴重な青春時代を悠々自適に送っている今は、かなり充実した時間となる筈だ。

だがしかし、そんな平穩を破るようなイレギュラーは突然に。具体的に言えば、数分くらい後でその異分子の接近を許してしまうのだが。

「うーあ、だりい。坂道長げえ、この登校ルートはまだ慣れねえな。」

えっちらおっちらと坂を登り切り、漸く校門に辿り着いた志本はそこで一息つく。

後は玄関で靴を履き替え、休み時間になるのを見計らって教室に入れば、ミッションクリアだ。

教師に会えば、腹が痛かったのだと適当にあしらって置けば良い。

玄関は校門を左に曲がった正面にある。その途中には明治時代創立の名残として西洋風のアーチが建てられている。

この高校の敷地内には他にもあちこちに当時を思い起こすような建築物が今もあるのだが、現時点を持って重要な所はそこではなくなつた。

何故かアーチの上に動く影が見える。下から見れば、丁度死角になる位置にいたのでまず気付く事はないだろう。

それは女の子だった。黒く長い髪をポニーテールにして後ろで結び、すらりと伸びた手足に、豊かではないが貧しくもない標準サイズの

胸囲。くつきりとした目鼻立ちに薄い唇の大和撫子風の美少女である。

それが身を潜めていた。素晴らしく場違いであることこの上ない。

まず、目的が不明だ。何をしたいのかが分からない。否、分からなかった。

……動いた。謎の少女はアーチの上で行動を開始する。

立ち上がり、縁まで走りそしてそのまま飛んだ。「死ねやこらアアアあああああああー！」

女子としてあるまじき過激発言を叫びながら、スカートのままで飛び出す。当然スカートは捲れあがり、主に目のやり場の問題でエライ事になっているが、彼女が特に気にしている様子はない。

そのモーシヨンは跳び蹴り。下をまさに歩いていた人物は、その声に気付き上を見上げるがもう遅い。

その人物の目に入ってきたのはローファアの底だった。もう少し早く見上げていればパンツが見えたかもしれない。……どうでもいいが。

「げばおっふうー!!」

顔面に脚が突き刺さり、衝撃に耐えきれずそのまま吹っ飛ぶ彼。

ずざざあとまるで紙切れのように地面を転がっている。それだけ蹴りの威力が半端じゃなかったのだろう。二転三転した後に、ゴガン！となかなか危険な音を立てて頭を打ちつけ、やっとその動きが止

まった。完全に気を失っているのか、ぴくりとも動かない。

「やっと捕まえたぞ連続窃盗犯め。」

蹴りを放った帳本人はすたんと華麗に着地して制服のほこりを叩き、不敵に笑いながらそう言った。

……これが志本とイレギュラーとのファーストコンタクト。彼にとつては気絶で迎えた最悪の初対面だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6117y/>

T.R.M.C 『イレギュラー達の日常ゲーム』

2011年11月20日18時29分発行